彷徨の跡。1976 年の時点で、私が暖めていた研究構想

最近、たまたま、或る研究会での私の報告のレジュメを見つけました。その研究会の参加者には、当時、東京大学教授だった、東洋、佐治守夫、芝祐順、それから、やはり当時、確か、自治医大に居られた、P.Janet ジャネーの研究者・高橋徹、その他の方々がいらっしゃったと思います。報告の内容は、私が、現象学の世界に入って行く以前に、どの様な研究を目指して模索していたかを垣間見ることのできる記録となっています。思案の末、この場で、その４５年ほど昔のレジュメ資料を殆どそのまま、ここに、ご紹介し、心理学あるいは情報学、目的的システム論などに親しんでいらっしゃる関係者の方々に、私がその当時こんなことを考えて居た、ということを知っていただこう、と思いつきました。そうすることは、その後の私の「現象学」以降の研究への移行と変貌とその意味について、お考え頂き、一つの「わかる」へとお誘いする切っ掛けになるかも知れないと気づいたからです。1976 年の研究会の後で、私は、1977 年に、イリノイ時代の友人 Tom Maguire とその縁で知り合った Doyal Nelson を頼ってカナダ・エドモントンのアルバータ大学に赴き、ひと夏を過ごします。そして、その図書館で、Amedeo Giorgi,と van den Berg, と Ernest Keen の著作を見つけることになります。その夏に読んで居たのは、フッサールの『経験と判断』とメルロ・ポンティの『知覚の現象学』でした。そして、１９７９年にフルブライト上級研究員の試験を受け、旅費と生活費を確保し、１９８０年、未知の人 Amedeo Giorgi に手紙を書いて、国ピッツバーグのデュケイン大学の心理学科に向けて、「現象学的心理学」なるものを学ぶため、一年間の単身赴任をすることにしたのでした。

以下は、1976 年に、研究会で配布した私の報告のレジュメそのものです。

****

1976 年 6 月 2 日

適応的行動の階層的秩序について　　吉田章宏

Ⅰ．問題意識

１．「たくさんの心理学が存在するが、一つの心理学が存在しない。」（ブレンターノ）状態がますます進行しつつある。統合への道は？［2020 註:心理学］

２．個体の発達の方向「学習のひろがりと高まりの方向、諸機能（感覚、知覚、思考、記憶、性格、など）の発達」、さまざまなタイプの学習、を統一的な視野のもとに収めることは出来ないものか？［2020 註：心理学的関心］

３．授業における、教師と子どもの「対決と交流」、そこにおける「集中」、「対応する力」、「見える」、「的確な指導」、これらを統一的にとらえる視点も求めたい。［2020 註：これらは齋藤喜博『教育学のすすめ』にある主題です。］

４．それは、「適応的行動」の目的・構造・機能を明らかにすることによって、可能になるのではないか。［2020 註：＜目的・構造・機能＞は、目的的システム論の一つの枠組みです。］

II．これまでに探索してきた幾つかの仕事

1. Gagne,R.M. *The Conditions of Learning.* Hierarchical model of eight learning-types. :Signal leaning, Stimulus-response learning, Chaining, Verbal

association, Multiple discrimination, Concept learning, Principle learning, Problem solving.(モザイク的、実験室的学習の羅列的整理)

２． Bloom, B.S.らの *Taxonomy of Educational Objectives.* Cognitive Domain : Knowledge, Comprehension, Application, Analysis, Synthesis. (Test のため整理と列挙)

３．Ausubel, D.P. *School Learning.* ［2020 註：邦訳『教室学習の心理学』］
(Discovery, Reception)×(Meaning, Rote) (学習の４つの基本的種類)
Representational learning, Concept leaning, Proposition learning,
Discovery learning, Problem solving, Creativity.

４．佐伯　胖　「『学び』の構造」：「学びのひろがりと高まりの諸段階」

５．Miller-Galanter-Pribram: *Plans and Structure of Behavior* Hierarchy of TOTE (Test-Operate-Test-Emit) (註 State-Transition Structure vs. U-C Structure)

6. Bruner, J.S. *Studies in Cognitive Growth* Enactive, Iconic & Symbolic Representation,(表現で区分する無理がある)Perceptual Readiness, Identification of Recurrent Regularity.

7. Vygotsky, L.S. 『精神発達の理論』＜本能―技能―知能―意志＞
＜意志には：Self-control. 意識化、記号を媒介とする自己支配＞

8. Lorenz, K. 『鏡の背面』 *Evolution and Modification of Behavior*（未見） 系統発生的にみられる適応的行動の段階、階層的秩序

９．そのほか
Piaget. J. Stages of intellectual development
物理的経験、論理‐数学的経験、脱中心化、構造化、
自己制御による均衡化
Freud. S. Erickson’s “Eight Ages of Man”
Jackson, H. Evolution and Dissolution of Nervous Systems

これからの探索の分野

Ｒ．Brown は、＜具体と抽象＞の進行と退行を考えるのに５つの分野を考えている；*Word and Things.*

進行　動物の進化:　　動物　→　人間:　Lorenz
現代語の歴史的発達：　原始　→　現代
個体の発達：　　子ども　→　おとな：Piaget, Bruner, Vygotsky
退行　脳外傷：　　失語症　→　正常
精神病：　　分裂病　→　正常　：Freud,　Janet

適応的行動の発達と退行については、分野として、もう一つの可能性を考えることもできる。

適応的・目的的システム論　例えば、
Wiener, N. *Cybernetics*
Ashby, W.R.： *Introduction to Cybernetics, Design for Brain,*
Sommerhoff. G.： *Analytical Biology, Logic of the Brain.*
Ackoff-Emery, ： *On Purposeful System*
Von Bertalanfy: *General System Theory,* 能動的人格系、シンボル、システム

そして、MacKay, Donald M.

III. D.M.MacKay　と　P. Janet の関連づけ

最近［2020 註：1976 年の時点から見ての最近］P.Janet を、荻野恒一『精神病理学入門』（誠信書房）などを通じて知り、関心を深める。

D.M.MacKay　の＜適応的・目的的行動の機構＞の構想

P. Janet　の＜人間行動・傾向＞の階層的秩序＞の構想

両者の間の関連と類似性に、興味を惹かれている。両者に共通する明晰さに惹かれる。

References:

D.M.MacKay: 1. *Information, Mechanism and Meaning.* MIT Press. 1969

2 The Epistemological Problem for Automata, in *Automata Studies.* Princeton, 1955 その他、多数

P. Janet: 1. 『人格の心理的発達』　関　計夫訳、慶應通信、1955 年

２．『神経症』高橋　徹訳　医学書院、1974 年　3. 「ジャネ」村上仁・荻野恒一、みすず書房、『異常心理学講座』第 10 巻、1965 年　4. 『精神力とは何か』ジャン・Ｃ．フィル―、村上仁訳、クセジュ文庫５２、1972 年

ほか、英訳、復刻版、波多野完治、今村新吉、村上仁、荻野恒一による紹介がある。

ＩＶ　D.M.MacKay と P.Janet の間の比較（便宜上、（＃）毎に対応関係を示す）

（1M）D.M.MacKay　適応的行動、行動の意識的制御　認識とコミュニケ―ションにおける情報の理論。生理学と意識的経験をつなぐ（橋渡しをする）形式的概念的モデルの構成を目指す。

（1J）P.Janet　行動（Comportement でなく Conduite）の心理学の「外界への適応の科学」、「外界全体との関連における人間、他者との関連における人間の研究」

（2M）D.M.MacKay　日常的・具体的問題を分析する

（2J）P.Janet　精神病理も。日常の具体的心理について分析する

（3M）D.M.MacKay「適応的行動」（註＊　Ｕ－Ｃ Structure は 別記）

（3J）P.Janet　「現実機能」現実への適応（態　「内閉性」）

（4M）D.M.MacKay　意識の統一性(Unity)Meta-organizing system の統合(integrity)

（4J）P.Janet　「統合」（1903　『精神衰弱』がある）

（5M）D.M.MacKay　Conditional Readiness(条件付きレディネス)

（5J）P.Janet　「傾向」（tendence）

（6M）D.M.MacKay　［対応する概念は見当たらず］

（6J）P.Janet　心理的力と心理的緊張（生理と心理の統合）（行動のエネルギーと水準の上昇を支えるエネルギー）

（7M）D.M.MacKay　Meta-organizing systems, Conscious experience,　“Feed forwrd”（註**）

(7J)　P.Janet　一次的行動と二次的行動。一次：内外の刺激に応じて反応する行動. 二次：感情（努力・疲労・勝利・敗北）、反省、過去の記憶の現在への融合

（8M）D.M.MacKay Meta-organizing systems の発達（Hierarchy of Abstraction）

(8J）P.Janet「精神の進歩は意識把握の相互の累積によって行われる」

（9M）D.M.MacKay　An “*imitative*” internal response mechanism (Cognition)

Comparator vs.Filter (cf. Leontiev, Stevens-Halle:

Pattern Recognition, Patten Matching)

（9J）P.Janet　「知覚は主体による客体の反復を内容とする」

（10M）D.M.MacKay　*Communication*　（A　→　B）

区別（物：A-as-a material Structure,

人：A-as-a goal-directed-sytem）

情報理論（１.数学的記述的情報理論、２.芸術の問題、

３.コミュニケーション理論）

（10J）P.Janet「他人の行為を自己の中で、自分自身の行為として繰り返す」

（＜社会への適応過程＞を最初から考えている）

（註＊）MacKay による Goal-directed activity の Flow-map: (U-C Structure)

(Figure 別記、2020 版では割愛します)

F: Field of Action. R: Reception System, E: Effector-System, C: Comparator(Evaluation), O: Organizing System

Three distinct functions of O:

a: *facts*: internal representation of the structure of the field of action, under "feed‐forward" from sense orgarns.

b: *skills:* formation and storage of a hierarchy of "sub-routines" conditionally ready to elicit patterns of appropriate effector action as complex "wholes"

c: *priorities*: determination of priorities among the hierarchically ordered set of possible goals and norms

（註＊＊）P. Janet による「人間行動およびその潜在的な形としての傾向の階層的秩序の構成図式」

１．反射的動作の段階
２．知覚的行動の段階
３．社会個体的傾向の段階
４．知的傾向の段階
５．確言的信念と意志の段階
６．反省的信念と意志の段階
７．理性的傾向の段階
８．実験的創造傾向の段階　（村上仁・荻野恒一による）

１．自己身体の時期
２．調節感情の時期
３．意識発生の時期
４．個人の形成
５．役の形成
６．我の形成
７．人の形成
８．人及び個性の伝記　（今村新吉による）

ＩＶ．　これからの問題

１．発達と学習を見通す統一的論理は何か？具体的事実を離れずに考えて行きたい。２．一人称・三人称の心理学でなく、二人称の心理学への移行（授業研究を通じて）をめざし

て、また、それらの統合への道をめざして、その立場からの発達・学習理論の構成、そのために、以上の諸構想は如何に活かされうるか？　３．＜現象学＞へ近づきたい。これまでのアプローチと両立、統合しうるか？　４．近々、ひとつのまとめ―――＜現象学＞（二人称の心理学）以前―――をしたい。（決着をつけたい）。以上

１９７６年６月２日　吉田章宏

1976 年当時、自分が、1953 年に、理科一類を捨てて、文科二類の教育学部を選び、教育心理学を選んだのは、このようなことをするためだったのだろうか、との迷いを生じていました。齋藤喜博主催の「教授学研究の会」での「教育と授業」の実践と研究に集中しながら、それまでの学び、―――心理学、認知心理学、サイバネティクス、一般システム論、目的的システム論、数学、等々―――を何とかそこに活かそうと、もがきながら、自分に果たして何が出来るかについては、確かな見通しも無く、当ても無く、自信も持てないでいました。それは、私が現象学を、真剣に、集中的に学び始める前のことでした。

以上、この広い世の中に、もしかしたら居らっしゃるかも知れない何方かの、何らかのご参考になれば、幸いです。（２０２０年８月８日（土）吉田章宏記す。）